jtk2001013

乳幼児期のジェンダー・フリー教育：問題提起と地域での実践に向けて(1)

―「男女共同参画社会をひらく ジェンダー・フリー教育と啓発」研究とその展開―

池田政子・阿部真美子・伊藤ゆかり・川上哲夫
沢登芙美子・佐野ゆかり・藤谷　秀・川池智子
高野牧子・坂本玲子・出口泰靖
(山梨県立女子短期大学ジェンダー・フリー教育プログラム研究会)

Gender-free Education in Early Childhood:
For Discussion and Practice in Yamanashi (Part 1)
– The Development of "the Study of Gender-free Education for the Society of Gender-equality" –

Masako IKEDA, Mamiko ABE, Yukari ITO, Tetsuo KAWAKAMI,
Fumiko SAWANOBORI, Yukari SANO, Shu FUJITANI, Tomoko KAWAIKE,
Makiko TAKANO, Reiko SAKAMOTO, Yasunobu DEGUCHI

Research Group for Gender-free Education Program
Yamanashi Women's Junior College

SUMMARY：The Research Group for Gender-free Education Program was formed in Yamanashi Women's Junior College in 1999. The group was provided with the Special Grant against the Declining Birthrate by the government in the same year and started a study of gender-free education for the society of gender-equality. Our study includes the development not only of a training program for teachers and parents but also of teaching materials. We conducted our program for teachers at kindergartens and day-cares in 2000. Furthermore, our workshop was held in the Forum of Women's and Gender Studies at National Women's Education Center in 2000.

This paper analyzes and evaluates the training program, the teaching materials and the workshop. We have emphasized the interaction with participants in the program and the workshop as well as with users of materials. That resulted in various kinds of responses from people in different positions. They are all very stimulating for our further study and practice.

Key Words：ジェンダー・フリー教育(gender-free education)、ジェンダー・バイアス(gender bias)、乳幼児期(early childhood)、研修プログラム(training program)、男女共同参画社会(society of gender-equality)

はじめに

山梨県立女子短大は、国の「平成11年度少子化対策臨時特例交付金関係事業」の一つとして山梨県私学文書課より「幼児教育プログラム研究開発事業」を委託された。幼児教育科教員およびジェンダー関連の授業を担当している共通教育担当教員がメンバーとなって、「山梨県立女子短期大学ジェンダー・フリー教育プログラム研究会」を結成し、「男女共同参画社会をひらくジェンダー・フリー教育と啓発」をテーマとした研究開発を行った。

本報告では、第一報として、この事業の経緯と研究成果（1999年度）を研修プログラムと教材の開発を中心に述べ、その後の教育・啓発活動（2000年度）にもふれる。さらに第二報で、これまでの山梨県全体の動きと現状を分析する中で、地域のジェンダー・フリー教育・保育の展開にとって、地方公立女子短期大学としての本学が果たしている役割を位置づけ、展望したい。

Ⅰ　「男女共同参画社会をひらくジェンダー・フリー教育と啓発」研究（1999年度）

1. 研究の目的

少子化が、晩婚化によりもたらされたものであり、晩婚化の原因の一つが女性の育児負担感の増大や家事・育児と仕事の二重負担にあることは、『国民生活白書』（平成9年版）[1]や『厚生白書』（平成10年版）[2]において、国が認めているところであり、「固定的な男女の役割分業や雇用慣行の是正」は「少子化の要因への政策的対応」の「中核」と位置づけられている（人口問題審議会）。「男女共同参画社会基本法」の成立（1999年6月）は、このような背景に負うところも大であった。「男女が、互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別にかかわりなく、その個性と能力を十分に発揮することができる男女共同参画社会」（同法、前文）の実現にとって、男女平等教育、ジェンダー・フリー教育は重要な課題である。

この課題に関し、これまで小学校以上の学校教育については実践や理論が蓄積されてきているが、乳幼児期については非常に少ない。安家（1999）[3]は幼児教育の実践者の立場から、この年の「女性学ジェンダー研究フォーラム」（国立婦人教育会館（NWEC））が多くのテーマで活況を呈していたのに比べ、保育関係者などの男女平等教育にかかわる活動の乏しさを指摘し、「幼児期からジェンダー・フリーを奨励」するために、保育環境や保育内容の見直しなどの提案をしている。この点で、同フォーラムのワークショップに、松戸市の行政担当者と保育者とが連携したジェンダー・フリー保育の取組みが登場したことは画期的なことであった[4]。私たちの研究は、この松戸市の取組みに大きな刺激を受けている。

男女平等参画社会の形成には、地域の生活に根をおろしているジェンダー（地域ジェンダー）[5]を意識化し、変えていく実践が必要である。そのためには、おとなたちの意識変革はもちろんだが、子どもたちの社会化の過程でジェンダー・バイアスを植えつけないことが非常に重要である。まだあまり関心の払われていない乳幼児期であるが、現実には多くのジェンダー・バイアスが、家庭だけでなく、子どもたちの生活の重要な場である保育現場にも存在する。そこで、山梨県という地域における、日常の保育や子育てにみられるジェンダー・バイアスの実態を把握し、それをもとにジェンダー・フリー教育・保育に向けての研修プログラムや教材を開発した。その際、地域において私たちの研究成果を活用し、家庭や幼稚園・保育所などがジェンダーの問題に関心を持ち、ジェンダー・フリーの実践に取り組もうとするときの一助になるよう、実践活動に配慮して研究内容・方法を設定した。

2. 研究内容と方法

研究は4つ（A～D）のパートからなり、研究成果の地域への発信を含めると次のような内容であった。

A．保育・子育てにおけるジェンダー・バイアスの調査と分析

A 1　山梨県内の公私立全幼稚園（73園）の教諭、および研究協力園2園の保護者を対象に質問紙による調査を実施（1999年11月下旬～12月上旬）

A 2　分析結果（一部）の回答者へのフィードバックと地域への公表

A 2－1　「保護者のみなさまへ（アンケート御協力のお礼と御報告）」（2000年3月10日付け）研究協力園の保護者に配布

A 2－2　「アンケート調査結果」（2000年3月29日）『男女共同参画社会を開く保育・子育てを考える研修会』にて資料として配布

A 2－3　地元紙に調査結果の紹介記事掲載：「幼児期の性別対応気づいて　県立女子短大チームがアンケート」（2000年3月28日、山梨日日新聞）

B．ジェンダー・フリー教育研修プログラム（保育者・保護者対象）の実践的研究

B 1　研修プログラムの開発

B 2　教材の開発・作成

B 2－1　ジェンダー・フリー絵本の制作（2000年3月29日、研修会にて配布）

B 2－2　「遊べるポスター」の制作（　同上　）

B 2－3　ビデオ視聴のための保育場面の撮影（1999年12月中旬、研究協力園にて）

B 3　研修実施：『男女共同参画社会を開く保育・子育てを考える研修会』の開催（2000年3月29日、山梨県立女子短大にて）

B 4　研修会の参加者による評価（アンケート調査）

B 5　地域への公表と発信

B 5－1　研修を保育者・保護者以外の地域の人々にも「公開」

B 5－2　地元紙に研修会についての記事掲載：「幼児期の子育て　実践例交え討議　県立女子短大で研修会」（2000年3月30日、山梨日日新聞）

B 5－3　同じく絵本等についての記事掲載：「ジェンダー・フリーの絵本とポスター製作　県立女子短大研究会」（2000年4月14日、山梨日日新聞）

B 5－4　絵本・ポスターを希望者に送付（上記記事にて案内）

B 5－5　絵本・ポスターを研修会参加者および研究協力園とその保護者に配布

B 5－6　絵本・ポスターを山梨県内の市町村立図書館等に寄贈し、地域の人々の利用に供する。

C．ジェンダー・フリー教育に関する文献の収集と論文のレビュー作成

C 1　文献の収集：今後の乳幼児期からのジェンダー・フリー教育・保育の研究と実践にとって示唆に富む文献・論文（主として邦文）を、対象を乳幼児期に限定せず収集。また人権教育、女性運動の史的研究、男女共同参画問題等にかかわる文献にも若干の目配りを行った。

C 2　レビューの作成：教育におけるジェンダーの問題を扱った文献を中心に作成。

C 3　地域への発信と公表

C 3－1　図書類は本学図書館（学外利用者に開放）にコーナーを設け、地域の人々の利用にも供する。

C 3－2　レビューは研究報告書に掲載。

D．研究報告書の作成

D１　『平成11年度少子化対策臨時特例交付金関係事業　研究報告書』[6]を作成（2000年8月）：研究経過、意識調査の結果、学会発表要旨、研修会の内容とその評価、文献レビュー、収集文献リストなどを含む。

D２　地域への公表と発信

D２－１　絵本、ポスター、研究報告書の３点を、県内全幼稚園に送付（2000年８月）

D２－２　研究報告書を希望者（研修会で予約）に送付（2000年８月）

ＡおよびＣについては第二報で扱うことにし、Ｂの研修プログラム開発等の具体的内容について報告したい。

3. ジェンダー・フリー教育研修プログラムの実践的研究

(1) 研修プログラムの開発と実施

すでに述べたように、本研究は保育者や保護者自身が持っているジェンダー・バイアスに着眼している。子育てや保育にかかわる人々が自らの内なるバイアスを発見し、家庭において日常化しているしつけ行為、また実践の場においては「隠れたカリキュラム」として潜在する保育行為と保育環境について、見直そうという内的動機づけをもたらすような研修プログラムが開発されることが望ましい。興味・関心を持って学習できる、気づき・発見学習を主とした参加型・作業型のプログラムを工夫して、しつけや保育の担い手が、ジェンダー・フリー教育の実践者となることを支援できるようなプログラムが必要である。今後の乳幼児期のジェンダー・フリー教育・保育の研究において、多様な研修プログラムの開発は非常に重要な課題であるが、今回は専門職である保育者以外の参加者も含む単発型の研修会を想定し、そのプログラムを検討した。下は、その概略である。

男女共同参画社会を開く保育・子育てを考える研修会

『楽しく体験！　ジェンダー・フリー保育』　　＊共催：県私学文書課

平成12年３月29日㈬　10:00～1:30（山梨県立女子短期大学　新館801大講義室）

●研修プログラム

1．参加型研修（進行：池田）　10:00～11:00

「どうしていますか？ 女の子・男の子」：保育現場でのジェンダー・フリー

①　ビデオ視聴と解説「女の子と男の子：園の生活の中で」

②　参加型ロール・プレイ「こんなとき　どうする？」（アンケート結果紹介を含む）

深沢ちさと・深沢理恵・三浦こずえ（山梨県立女子短大幼児教育科学生）

③　ジェンダー・フリー絵本、遊べるポスター紹介「親子で楽しくジェンダー・フリー」

2．シンポジウム「ジェンダー・フリーの保育を考える」（司会：阿部）　11:00～12:00

講師の話：林　信二郎（埼玉大学教授）

益田洋美（東山梨教育事務所・神金小学校元教諭）

参加者との質疑応答

3．フリー・トーキング・タイム（軽食つき、803演習室）　12:00～1:30

当日は保育室を設け、利用者があった。また、意識調査の分析結果（一部）や新聞記事などを資料配布し（上記A2)、当日のプログラムにも「ジェンダー」についての解説と「ジェンダー・バイアスをなくすための９か条」（K. Wellhousen（1996)[7]による）を記載し、参加者へのメッセージと情報の

発信とした。

参加型研修「どうしていますか？　女の子・男の子」：保育現場でのジェンダー・フリー

①　ビデオ視聴

研究協力園の日常的な保育場面を撮影し、その中から環境構成や保育行為において性別カテゴリーの使用やジェンダー・バイアスのみられる場面、また逆にバイアスのない場面をとりあげて、10分程度に編集したものである。保育室の戸棚の性別による区画と指定、家庭で作られた座布団の色、歯ブラシとコップの色、性別の呼称（「くん」と「さん」）、クリスマス発表会の性別の並び方（前列が男子、後列が女子など）、砂場での男女一緒の遊びの様子、男の子たちがしているサッカーをボールを手に持って見ている女の子への教師の援助、女子と男子がいっしょにサッカーをしている様子などである。場面紹介のナレーションの最後は、「御覧いただいた園の様々な場面は特別なケースではありません。ジェンダーを考える糸口にしていただければ幸いです」となっている。プログラムの冒頭に、参加者の多くが日頃目にし、体験していると思われる具体的な場面を“切り取って”視覚的に呈示することによって、研修会のテーマの提示と導入とした。

②　参加型ロールプレイ

導入に続いて、参加者がジェンダー・バイアスを意識化し、「問題」として認識するための方法として行われた。そのためには、参加者ができるだけ身近に感じられる素材を扱うことが有効である。そこで保育者と保護者の調査結果から、子どもへの対応や「言葉かけ」にジェンダー・バイアスがみられた典型的な3つの場面を取り上げ、シナリオを作成した。場面1：言葉づかいと行動の“乱暴な”女の子が男の子とけんかし、男の子が泣き続ける場面、場面2：保育室で女の子と男の子が静かに本を読んでいる場面、場面3：女の子と男の子が折り紙で作ったパンダを見せにくる場面である。

シナリオによるロールプレイは、本学幼児教育科の学生と研究会メンバーの教員によって演じられ、参加者の関心を高め、研修主催者と参加者が一体となって学習を進める一助とした。参加者の能動的な関与による意識化を促すために、場面呈示の後、進行役の教員が参加者の反応に応じて次のような働きかけを適宜行う双方向型の進行によって、シナリオを展開させた。(1) それがどんなジェンダー・バイアスなのか、あるいは自分ならどう対応するかを参加者に問いかける、(2) ロールプレイに参加してもらう・他の参加者のロールプレイを見る、(3) 参加者によって演じられた内容の意味や解釈を会場にフィードバックする、(4) 調査結果にみられた対応や働きかけの例をロールプレイによって示す、(5) その場面でなぜ子どもの性別によって対応が異なるのかを問いかけるなど。ロールプレイをこのように使用した双方向参加型の学習方法は、学習内容自体を参加者と主催者、また参加者どうしが共同して創りあげてゆくことであり、参加者の学習への動機づけを高めると考えられる。

研修会において、各場面が実際どのように展開したかについて、以下に示す。

〈場面1〉「先生」役と「子ども」役は学生が、AからHは教員が演じた。

進行役：ある幼稚園のちさと先生のクラスです。あ、女の子と男の子がけんかしてますねぇ。どうなるでしょう？【場面呈示】

りえ(女の子)：(男の子に)「なんだ、おまえなんか、ばかやろう」と言いながら、突き飛ばす。

こず(男の子)：よろけて、しゃがみ込み、大声で泣き続ける。

進行役：こんなとき、みなさんなら二人にどんなことばをかけるでしょうか？　男性保育者もこれから増えてきますので、男性に先生役をやっていただきましょう。(笑)

【　→　参加者への問いかけ　】

男性参加者（私学文書課長）：泣くな、泣くな。二人で仲良く（二人の手を取って）握手しなさい。

【 ← ロールプレイへの参加・他の参加者のロールプレイを見る 】

進行役：今の対応の中には、「男の子だから、女の子だから」という言葉はありませんでした。　【 → 演じられた内容の意味や解釈の呈示 】

でも、アンケートで「自分がこう言った」という回答で多かったのはこんな風でした。

【 → 調査結果で多かった「言葉かけ」のいくつかを、ロールプレイにより呈示 】

りえ：(男の子に)「なんだ、おまえなんか、ばかやろう」と言いながら、突き飛ばす。

ちさと先生：りえちゃん、女の子でしょ、そんなこと言っちゃだめよ。

A：女の子だからもっと優しく話そうね。

B：りえちゃん、そんな言い方、かわいくないよ。

こず：よろけて、しゃがみ込み、大声で泣き続ける。

C：男の子なんだからもう泣かないの。

D：男の子は強い子でしょ、泣くんじゃないの。

E：男の子はそんなことくらいで泣くんじゃないの。

F：男の子なんだから、がんばって泣き止もう。

G：男の子なんだからめそめそ泣かないの。

H：強い、強い、男の子だもんね。泣かないね。

進行役：いろんな言葉が降ってきましたね。どう思われますか？

【 → 参加者への問いかけ 】

〈場面２〉

幼稚園で。女の子と男の子が、部屋の中で静かに絵本を読んでいる。

【場面呈示】

進行役：今日はいい天気。ほかの子どもたちはみな外で遊んでいます。二人はさっきから絵本をよんでいます。もしみなさんが保育者としてことばをかけるなら、どんな風に言いそうですか？　今度は学長にお願いしたいと思います。

【 → 参加者への問いかけ 】

学長：一緒に本を読むのに参加したいですね。(笑)　【 ← 参加者の応答 】

進行役：では、保護者のかたに多かった例をちさと先生にしてもらいましょう。

【 → 調査結果にみられた「言葉かけ」を、ロールプレイにより呈示 】

ちさと先生：(女の子に)「りえちゃんは、ご本がほんとに好きなのね。」

(男の子に)「こずくん、お友だちは外でサッカーやってるけど、こずくんもやってみない？」

進行役：どうしてこれがジェンダー・バイアス？（会場へ）【　→　参加者への問いかけ　】
参加者：男の子は元気でたくましいというイメージがあるのではないでしょうか？　だから、「どうしてあなただけ遊ばないの？」とか、あの子は変わっているね、という対応や解釈をしてしまうのだと思います。　【　←　参加者の応答　】

〈場面３〉

> 折り紙でパンダの制作をしている。
> 女の子と男の子がいっしょに「先生できたぁ」と見せにくる。

進行役：二人とも一生懸命作っていました。どんなことばをかけてあげるでしょう？
【　→　参加者への問いかけ　】
進行役：では、またとても多かった例をちさと先生にみせてもらいましょう。
【　→　調査結果にみられた「言葉かけ」を、ロールプレイにより呈示　】

> ちさと先生：（女の子に）「わあ、かわいいパンダちゃんねぇ。」
> （男の子に）「かっこいい！　元気なパンダ君だね」

進行役：これもアンケートに多かった回答です。ちさと先生の胸の内にどんな思いがあるんでしょうね。　【　→　参加者への問いかけ　】
参加者：「ほめ言葉」として、男の子には「かっこいい」、女の子には「かわいい」という言葉をかけがちですね。　【　←　参加者の応答　】
進行役：同じ「ぞうさん」を作っても、男の子と女の子とでは、言葉のかけ方が違うのはどうしてでしょうか？
参加者：子どもが喜ぶからではないでしょうか？　子どもの様子を見ていて（そうする）。
【　⇔　参加者の応答をめぐる「やりとり」の展開　】
進行役：ちさと先生（学生）は、自分ならどうしたいですか？　やってみてください。
【　→　保育者志望の学生への問いかけ　】
「先生役」の学生：「うーん、ふたりとも上手にできたねえ。（ぞうさんの）名前はなんていうのかな？」　【　←　ロールプレイによる学生自身の意見表明　】
進行役：男の子・女の子という枠にくくるのではなく、作った子どもの気持ちになって受け止めてあげようという気持ちが出ていたのではないかと思います。
【　→　演じられた内容の意味や解釈の呈示　】

当日実施された「研修会感想アンケート」の結果（『研究報告書』に記載）によると、「ロールプレイが面白かった」とするものが多く、参加者に好評であった。また、「今日の研修会を参考に、心がけたいこと、やってみたいこと」として、「無意識に言っていることに気づいたので、気をつけて言葉かけをしていきたい」などの感想が目立ち、参加者のジェンダー・バイアスの意識化に有効であったといえよう。ただし、実際の進行上、20分程度しかとれず、ロールプレイへの参加者の取り込みが不十分だったこと、それぞれの場面の提起している問題について参加者と十分やりとりできなかったことは、反省点となった。

シンポジウム「ジェンダー・フリーの保育を考える」

続いてのシンポジウムは、ビデオやロールプレイによって呈示され、意識化された課題を知識として整理し、より広い枠組みの中に位置づけて理解するための学習として設定した。講師の選定にあたり、研究と実践のバランスについて配慮した。また、山梨県でも小学校以上の学校教育現場では、ジェンダー・フリー教育の象徴とも言える「混合名簿」実施の取組みがなされており、「幼小連携」の文脈においても、小学校での実践を知ることは保育関係者や保護者にとって刺激になると考えた。そこで、幼児教育研究者、また国立大学付属幼稚園長経験者としての立場から林信二郎氏、小学校教諭、山梨県教組女性部副部長として「混合名簿」の問題に取り組んだ立場から益田洋美氏に、問題提起のための発言を依頼した。

林氏は、現状について、(1)「男の子らしく、女の子らしく育ってほしい」という親の思いが園児の名前、服装などからも明瞭で、「女の子」「男の子」という枠にはめられがちに人格形成されていることが、園での「遊び」の性差からもうかがえること、(2) 幼稚園の運営が専業主婦の子でないと入れないという点で、親自体の生活が性別役割分業に根ざしているといえること、(3)「保育文化」そのものが性差を想定したものであることを指摘した。そして、これからの幼児教育にはジェンダーの視点が必要であるとし、ジェンダー・フリーへの課題として「親がどういうテーマで子どもを育てるか」ということ、また「『男性』と意識せずに『幼稚園文化』にとけこんでいる男性保育者」の存在を、課題解決への一つの可能性として挙げた。

益田氏は、自らの男女混合名簿の取組みの経験から、留意点として (1) いろいろな情報を入手することによって「こういうことができる」ということを知ること、(2)「いつでもだれでも、できるところからやっていく」こと、(3) 反対意見も大切にすることを挙げた。また、混合名簿を実施することによって、(1) 実際には何の問題もない、(2) これまで変えなかったのは、「単なる慣習」だった、(3) 教師自身が無意識のうちに「男女分けを植え付けてきた」ということが認識できたと述べた。

司会者は両氏の発言を受けて、(1) 幼児教育の現場にとって「いつでも、だれでも、できるところから」という提言は貴重であること、(2) 慣れ親しんだ「援助」という行為を、益田氏の言う「慣習化」、林氏の「保育文化」という視点で見直すと、これまでと違った様相が見えてくること、(3) この「気づき」がさらに新しい可能性を築いてゆく、という総括を行った。ここで提示された「慣習化」および「保育文化」・「幼稚園文化」は、保育におけるジェンダーを分析し、「ジェンダー・フリーの保育」を研究する際、非常に有効な概念となるように思われる。

質疑応答では、参加者から、「今まで、無意識に意味のない区別をしていたが、個のやる気を大事にすることが第一と考えた。男性保育者もほしい。」「園で最近大きなぬいぐるみを入れた。女の子がままごとに使うかと予想していたが、実際には男の子が抱きしめて使っていた。男の子には青、女の子にはピンクをやめよう、だけではなく、それぞれの個性を大切にしようということが抜けてはならないと思う。」「男女混合名簿について、今はもうそういう時代だからという認識だけで変えるのではなく、子どもたちの成長にどう影響するのかということまで考えていくべきだと思った。」などの意見が出された。これらは、(1) 子どもたちを性別カテゴリーで扱うことをやめることは、子どもを「画一化」したり、「中性化」したりすることではなく、ひとりひとりの子どもに向き合い大切にするという方向性を持つこと、(2)「ジェンダー・フリー」の保育や子育てが、単に「新しい慣習」としてではなく、子どもたちに何が望ましいかという明確な認識を持って実践されるべきことの指摘として、重要な表明となった。

フリー・トーキング・タイムでは、軽食を取りながら自己紹介を兼ねて全員が発言し、このテーマに関心を持って集まった様々な立場の人々が交流した。

研修会の評価

参加者は約70名、保育者（本学幼児教育科卒業生を含む)、幼稚園長・教頭などの管理職、保育所・幼稚園の保護者、保育者志望の学生などの保育関係者が多かったが、それ以外にも、県女性センターの企画担当者、自治体女性政策担当者、本学が実施している「男女共同参画アドバイザー養成講座」の修了者など、ジェンダー問題に関心を持つ地域の人々が参加した。このことは保育や子育てにおけるジェ

ンダー・フリーが、狭い意味での保育課題としてだけでなく、「男女共同参画社会づくり」に向けての地域課題としても認識され、今後広範な地域ネットワークを形成して実践化される可能性を開いたことを意味しよう。この点からも研修会の目的が達成されたといってよい。

当日実施した**「研修会感想アンケート」の結果**によると、多くの参加者が「満足」と答えている。その理由で多かったのは、「今後役に立つ内容」「ロールプレイが面白かった」「新たな発見や再認識があった」「講師の話をはじめ説明がわかりやすかった」「資料などの用意が適切だった」などである。また、参加者自身の今後の実践としては、子どもへの言葉かけの見直し、一人一人の個性の尊重、周囲の人々へのジェンダー・フリー教育のPRなどが挙げられていた。さらに、研修会全体の感想として自由記述されたもののうち、**プラス評価の内容**は次のようにまとめられる。

(1) 内なるジェンダーについての気づき：「日常や教育でのジェンダー・バイアスについて、具体的に気づくことができた」「心ではジェンダー・フリーと意識しても日常では男女を分けていた」「考えていた以上に私たちの固定観念の大きさを実感した」など。

(2) ジェンダー・フリーについての理解と発見：「混合名簿に問題がないことが理解できた」「県外で多くの学校が混合名簿であることに驚いた」「みな同じ人間ということを少し理解でき、現場での自分の保育を考えていくつもり」「男の子だから、女の子だからではなく、一人一人のよさをわかる保育者になりたい」「幼稚園文化（新しい響きの言葉）の改革にかかわる大切なテーマ」など。

(3) 研修会および主催者への評価：「雰囲気がアットホームで、問題提起形式の発表も素晴らしい」「なごやかな雰囲気で参加しやすく、楽しく学べた」「進行が適当でよかった、またこういう機会があれば来たい」「保育士にも呼びかけた研修をしてほしい」「対象別に（世代等）継続して開催を希望」など。

このように、ジェンダーの意識化とジェンダー・フリーの実践への動機づけという点で有効な研修であったと評価できる。また単発の研修会としての学習プログラムも評価されたといえよう。

一方、**マイナス評価・疑問**と考えられる記述には次のようなものがみられた。

(1) 「ジェンダー」という用語の提示に関して：「『ジェンダーって何』をクローズアップしないと、会の意味が見えてこない」「“女の子だから”を色めがねとしながら、"ジェンダーに気づかせる”というのはよくわからない」

(2) 「ジェンダー・フリー」というテーマに関して：「不必要な差別や偏見は取り払われてほしいし、男女平等について考える機会も大切だが、女性は産む性であり、全くの平等なのか、役割分担も大切と思うこともある、勉強すべきことがたくさんある」「女の子のネガティブな面ばかりがかえってクローズアップされているように感じる」

(3) 学習・実践の男性への広がり：「女性から見た『ジェンダー・フリー』にとどまっているという印象」「男女相互の意見交換が必要」「女子短大でのジェンダー・フリー研究では説得力のなさを感じる」

これらの意見や感想は全体から見ると少数ではあるが、ジェンダー・フリーの保育・子育てについての啓発や実践の際に、配慮すべき重要な事がらを含んでいる。**プログラム開発の観点からは**、「単発の研修会」で盛り込める内容には限度があるが、一般的・入門的な意識啓発、保育者研修、管理職研修、子育て支援者研修など、研修目的を明確にし、ターゲットとする参加者の絞り込みやそれに特化した学習プログラムの開発をし、実践的蓄積をしていくことが必要である。

「ジェンダー」については、舘（1998）[8]が政府の「男女共同参画」政策における「ジェンダーに敏感な視点」、地方行政や学校教育の場における「ジェンダー・フリー」という用法について貴重な分析を行い、ジェンダーという語の用い方に関する認識の共有の必要性を説いている。しかし、現状では「ジェンダー」という語それ自体を含め、国の政策から自治体の女性政策のスローガン、また地域の生涯学習事業の講座タイトル、地域で実践活動をしている人々や学校教育および性教育関係者の言説まで、様々なレベルで微妙な意味内容のズレがまだ認められ、混乱を生じていると言ってよい。例えば、文部省生涯学習局の平成12年度の事業名称「0才からのジェンダー教育推進事業」はどのように受け取れるだろうか。「実施要領」には、「家庭及び地域における男女共同参画の視点に立った教育についての課

題」、「『ジェンダーにとらわれた』現状を改善するために地域で取り組むべき課題」というような記述があるので、ようやく事業の趣旨が理解できるが、一般には「○○教育」とすれば「○○を肯定し、それを目標とする教育」と解釈するのではないだろうか。つまり「教育」という言葉が用いられるとき、○○は子どもが「学習して身につけるべき」ことがらを指すと考えるのが普通であろう。「国際理解教育」「福祉教育」「ボランティア教育」などは最近の例である。この用法と同じに読み取られると、「ジェンダー」は肯定的な意味を帯びることになる。上述の参加者の「誤解」した「ジェンダーに気づかせる」という用法も、「ジェンダー教育」と同様に「気づかせる」という言葉と結びついて生じたものである。保育という文脈で「気づかせる」が使用されたので、子どもが新しく「身につけるべき」ことがら、つまり「発達的に望ましいこと」をイメージしたと思われる。「ジェンダー」という語をめぐる用法のいっそうの検討あるいは創出が必要であり、その際、研究的視点とともに地域での啓発や実践への有効性も重視すべきであろう。

上記(2)、(3)、すなわち「ジェンダー・フリー」というテーマをどう呈示して浸透させるか、また男性をどう取り込んでゆくかということは、地域での男女共同参画やジェンダー問題をテーマとする生涯学習事業にとっては、重要かつ一般的な課題であり、今後の研修プログラム開発にあたって、さらに研究が必要である。最後に、「女子短大でのジェンダー・フリー研究では説得力がない」という指摘は重要な論点であり、次報でふれることとする。

(2)　教材の開発・作成

研修プログラムの視覚的学習教材として、また家庭や幼稚園・保育所などで乳幼児と保護者・保育者が使用することを目的として、「ジェンダー・フリー」をテーマとした絵本とポスターの開発・作成を行った。おとなにとっては自らのジェンダー・バイアスの意識化に役立ち、子どもにとってはひとりで、あるいは保護者や保育者、仲間と共に見たり、読んだり、遊んだりすることによって、ジェンダー・スキマティックでない情報処理（S. L. Bem による[9]。脚注参照）の体系（認識枠）の形成を促し、すでに学習されているジェンダー・バイアスに拮抗する（アンチ・バイアス）メッセージとなるような内容を検討した。

ジェンダー・フリー絵本の作成

近年、「ジェンダー・フリー絵本」と呼べるような絵本が自治体の男女共同参画行政に関連して作られ初めているが、その数はまだ少ない[10]。例えば、平成11年度文部省「女性のエンパワーメントのための男女共同参画学習促進事業」の委嘱によって「はちのへウィメンズアクション」が作成した2種の絵本[11),12)]では、母親と父親、女の子と男の子の家庭や小学校での「性別役割分担」の姿を具体的に描き、登場人物にそれに対する疑問を語らせたり、逆に「性別役割分担」をしていない家族を描いてジェンダー・フリーのモデルを示すという手法がとられている。これらは幼児期以降の子どもたちを読者として想定していると推測される。本研究では、乳児も対象にしたジェンダー・フリー絵本がほとんど見られないことから、乳児期から親しんでもらえるような絵本の開発にあたった。乳幼児が見て楽しめ、家庭や保育の場で繰り返し手に取って見る中で、自然に作り手のメッセージが伝わることを意図した。そのため、乳児にも扱いやすい小型（18cm×18cm）で軽量の絵本とした（**写真1**）[13]。また、文字数や場面数、絵と字のバランスの適切さを検討し、見開き1コマを1場面とし、左に少ない文字数のひらがなによる文、右に絵とし、表紙、裏表紙を含め14場面に抑えた。「絵」は三角形、四角形、円を基本形とした様々な形と色によって構成されている。ジェンダー・フリーに関する直接的メッセージは、最後の3場面から裏表紙へと連続した「これって　おんな　おとこ　　……　どっち……。」「へんな　しつもん　　そんなの　こたえられないよ」「どっちでもいいね」「どれもすてき」である。それ

注：ジェンダー・スキマティックな情報処理（gender schematicity）とは、「社会的現実をジェンダーに基づいて分類させるように仕向け、人や属性、行動、その他諸々のことがらを、同じように可能な他の次元に基づいてなすのではなく、文化の中にゆきわたっている男らしさや女らしさという両極化した定義にもとづいて分類するよう仕向けるレディネス」である。

までの場面も問いかけの形で展開されており、読み手が問いかけに応じながら自由に「絵」を感じ、味わってくれるよう意図したものである。その過程は、メッセージの送り手である私たち制作者との対話でもある。絵は、研究会メンバーである川上哲夫教授（美術専攻）による原画を基に作成したコンピューターグラフィックである。

遊べるポスターの作成

絵本は乳児からを対象として、抽象的な表現の中にジェンダー・フリーのメッセージを込めたものとしたので、ポスターは、すでにジェンダー・バイアスが「刷り込まれ」、ジェンダー・スキマティックな情報処理傾向も強くなる幼児を対象に、子どもたちの日常に存在する性別役割分担に対するアンチ・バイアスのメッセージを盛り込むことにした。子どもたちが保護者や友だちと遊んで楽しめ、かつ家庭や幼稚園・保育所で子どもたちの目につく場所に貼ってもらい、日常的にメッセージを受け取ってもらうことを期待して、「遊べるポスター」という形式を選択した。保育者・保護者の調査結果でジェンダー・バイアスが強く現れていたことがらも参考にして、木を切る力持ちの女性、道端の花をながめる男の子、重い荷物を運ぶ女性、元気に遊ぶ女の子、一緒に料理をする女性と男性などを描いた。衣服の色使いにも配慮し、「ジェンダー・フリー国」が表現された（**写真２**）[14]。

ポスターには「この国には　女だから…　男だから…　という　ことばは　ありません。　みんなが自分らしく　思いやりを　もって　なかよく　くらしています」（ふりがなつき）というジェンダー・フリー国の紹介がついている。この国の住人であり、ポスターのキャラクターである「ふりい」が国を案内し、「みんなの国とどこがちがうか　くらべてみてね」と呼びかけている。このキャラクターを切り取って、ポスター上の７ヶ所の「吹き出し」（例えば、「元気いっぱいの女の子、かっこいいね」）に合わせた切り口に差し込んで、遊べるようにした。子どもとおとなが一緒に遊ぶことを通じて、子どもの中のジェンダー・バイアスに気づいたり、また子どもの反応によっておとなの側のジェンダー・バイアスが意識化されることをねらっている。絵は、幼児教育科学生の勝亦舞帆が描いた。

写真１　ジェンダー・フリー絵本『これ、なぁんだ』

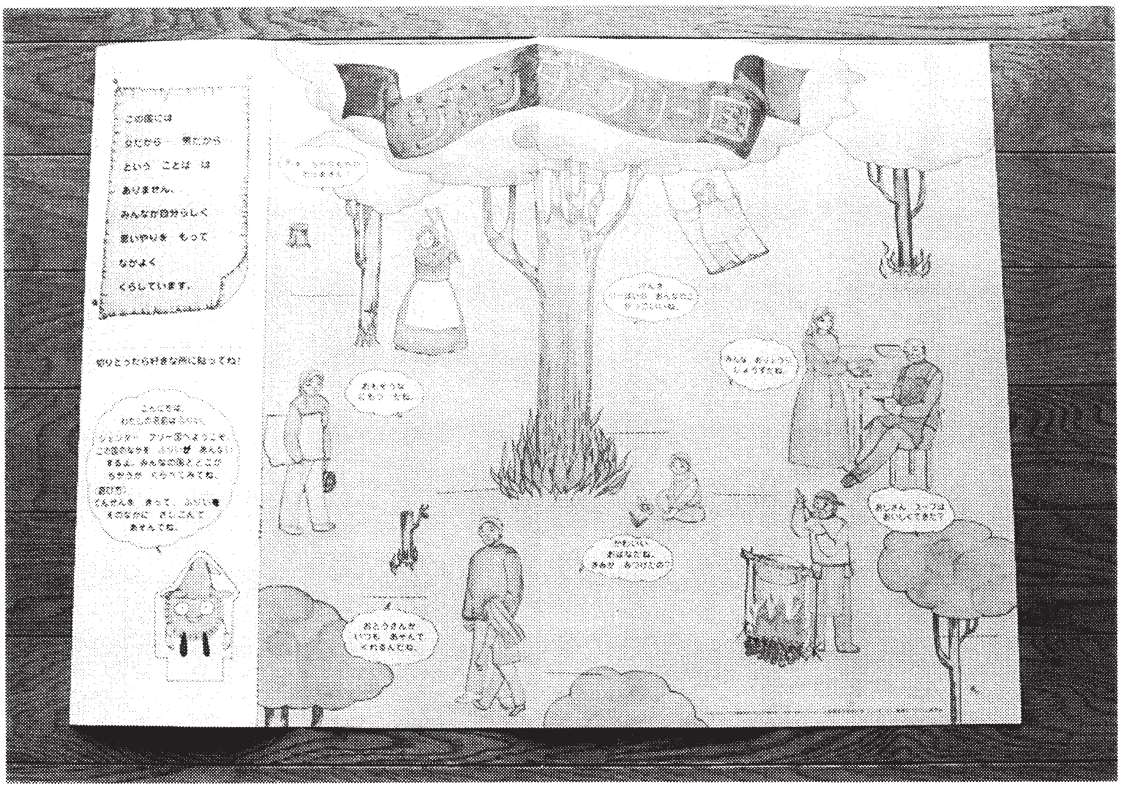

写真２　遊べるポスター『ジェンダー・フリー国』

Ⅱ　研究の展開（2000年度）

上記委託事業の終了後も引き続いて、研究成果の地域の外への発信、および本学での教育に活かし保育者養成と関連づける作業や活動を行った。次にその概要を示す。

E．学会発表（内外の研究者・実践家への発信）

E１　日本保育学会第53回大会においてポスター発表（2000年５月）

E１－１　「ジェンダー・フリー教育プログラムの実践的研究：保育者・保護者を対象として」[15]

E１－２　「保育・子育てにかかわるジェンダー：保育者および親の意識」[16]

E１－３　ジェンダー・フリー絵本と遊べるポスターの希望者への会場での頒布

E２　環太平洋乳幼児教育学会（PECERA）においてポスター発表（2000年７月）：A training program of gender-free education for professionals and parents.[17]

F．保育者養成課程への取り込み

F１　「乳幼児心理学演習（保育とジェンダー）」：科目名に明記し研究成果を学習に活用

F２　「総合演習」：ジェンダー・フリー教育を学習テーマの一つに設定

F３　学生による学習成果の学外での発表（NWECのワークショップへの参加）

F４　「乳幼児心理学演習」での上記学生の報告とパフォーマンスのビデオ視聴

G．「2000年女性学・ジェンダー研究国際フォーラム」（国立婦人教育会館）への参加（2000年８月）（全国への発信）

G１　ワークショップ『幼い子どもたちが開く男女平等参画社会　保育の場から地域ジェン

ダーを変えよう ── 保育者養成校の試み ── 』の開催
G 2　絵本・ポスター・研究報告書を希望者に頒布
G 3　『資料集』および『パフォーマンス　ジェンダー幼稚園の一日』シナリオの頒布

保育者養成課程への取り込み

本学幼児教育科では、国の幼稚園教諭免許にかかわる教職課程の改定とそれに伴う再課程申請によって、2000年度より教育課程の変更が行われた。その際、「ジェンダー」の問題を保育者養成における重要な課題として、明瞭に教育課程に位置づける改革を行った。一つには、これまでも乳幼児期の性・ジェンダーを扱っていた「乳幼児心理学演習」を「乳幼児心理学演習（保育とジェンダー）」として、科目名に明記した。さらに、現代的課題を総合的に学習する「総合演習」のテーマの一つとして「ジェンダー」を扱うこととした。従来実施されてきた1, 2年生合同の幼児教育科合宿ゼミをこの授業の一環として位置づけ、分科会の一つに「ジェンダー・フリー教育」を置いた。

2000年度の「乳幼児心理学演習」（2年生）では、前年度の研究における調査結果や研修会プログラムのロールプレイも学習材料として活用した。学生が自分の生育史の中で家庭や保育所・幼稚園、学校で経験してきたジェンダー・バイアスを含むおとなや仲間からの働きかけ、自分自身の中にあるジェンダー・バイアス、また保育実習などで見聞した保護者や保育者、そして子どもたちのジェンダーにかかわる言動など、学生たち自身の体験を材料とした話し合いを中心に進行した。7月の合宿ゼミの「ジェンダー・フリー教育」分科会では、教育実習直後で経験材料の増えた2年生が分科会を運営し、1年生を含めた活発な話し合いが持たれた。

ワークショップの開催

前年度の研究成果を全国に発信し、上記のような保育者養成校としての取り組みや学生たちの意見をアピールして、ジェンダーの問題に関心を持って様々な地域・場で活動している人々と交流し、共に考え合う目的で、国立婦人教育会館の「女性学・ジェンダー研究国際フォーラム」でのワークショップに応募し、採用されて実施した。プログラムは以下のようであった。

2000年女性学・ジェンダー研究国際フォーラム（国立婦人教育会館）ワークショップ No.92
幼い子どもたちが開く男女平等参画社会
『保育の場から地域ジェンダーを変えよう ── 保育者養成校の試み ── 』
2000年8月5日(土)　1:00～3:00（国立婦人教育会館　208研修室）

Part Ⅰ　地域の中の「保育ジェンダー」（山梨県の状況）
① ワークショップの趣旨説明と山梨県内の動き
② 保育思想・保育者養成カリキュラムにおけるジェンダー問題
③ 私たちの活動経過
④ 私たちのつくったジェンダー・フリー絵本、遊べるポスターの紹介
⑤ 保育環境・保育者の意識の中のジェンダー（調査結果から報告）

Part Ⅱ　「ジェンダー・フリーの保育を考える」
① 学習し、実習に行って考えたこと（学生の発表）：白川佐智・長田かな絵
② パフォーマンス「ジェンダー幼稚園の一日」
芦澤恵・長田かな絵・白川佐智・小松唱子（山梨県立女子短大幼児教育科）
③ みんなでロールプレイ：じゃあ、「ジェンダー・フリー幼稚園の一日」は？

Part Ⅲ　みんなで話し合おう

当日は約60名の**参加者**があった。受付名簿の記載によると、幼稚園・保育所関係者、小学校教員、教員養成・保育士養成にかかわる大学教員、学生、介護福祉士、自営業、会社役員、市町村女性プラン関係者、市町村女性行政担当者、議員、女性センター職員、文部省男女共同参画学習係の担当官など多様な人々が、沖縄、鹿児島から宮城、山形まで20の都府県から参加した。また、本学で実施した「男女共同参画アドバイザー養成講座」の自由参加メニューである「ジェンダー研究ツアー」にはフォーラムへの参加を組み込んでいたこともあり、講座受講生がワークショップ運営をサポートしながら参加してくれた。前述の「研修会」は山梨県という地域への発信であり、そこにも多くの人々の参加があったが、ここではさらに、地域の人々と大学と学生が共同して「地域から全国へ」という発信ができ、またその場に地域の人々が「立ち会った」ことは、今後の地域でのネットワーク形成に大きな意味があるだろう。また、松戸市の「ふりーせる保育」関係者も参加し、学生の問いかけに答えてくれた。その他の多様な参加者との交流もでき、ネットワークが地域を超えて広がってゆく手応えが感じられた。プログラムの「Part Ⅰ」は、配布した『資料集』と『報告書』、絵本・ポスターを基に進行した。この内容については、第二報で扱うので、ここでは「Part Ⅱ」について報告する。

学生の発表

白川さんは、自分がジェンダー・バイアスのある環境で育ってきて、大学の授業で「ジェンダー」という言葉を学び、自分の中に「女の子、男の子はこうあるべき」という固定観念が定着していることに気づいたこと、実習幼稚園で保育者のジェンダー・バイアスのない援助を経験してすばらしいと感じたこと、また「足が大きくて、強そうだから」ある女の子が好きという男の子の発言に、その女の子も他の子どもたちも保育者も、何の違和感も持たない様子だったというエピソードを紹介し、こういう実践現場があることを体験できてよかったと語った。

長田さんは、合宿ゼミの「ジェンダー・フリー教育」分科会での話し合いから、「子どもたちを並ばせるときは男女別のほうがまとめやすく、子どもにもわかりやすいので早く並ぶことができる。こういう場合は仕方がないのではないか、という意見が出た。子どもにわかりやすいのも社会がそういう環境になっているからだし、まとめやすければいいのかという反論もあって、結論がでなかった。どのように考えればよいか教えてほしい」と、参加者に問いかけた。これに対し、「ふりーせる保育」を実践している保育者から、保育者が先頭に立って子どもたちを「一斉に動かそうとする」保育ではなく、子ども一人一人がやりたいことを援助する保育であれば、男女の区別の必要もないこと、「ふりーせる保育」では固定したクラス設定もなく、子どもがやりたいような環境を選択肢としてどれだけ準備できるかが課題であり、今までの保育技術では通じないことなど説明があった。学生たちは、ジェンダー・フリー保育の実践が子どもひとりひとりの尊重と不可分に関連していることを、実践者から直接聞くことによって深い学習ができた。ジェンダー・フリーという視点が、乳幼児の教育や保育の本質を問うテーマであることが理解されたようであった。単に一つ一つの保育行為だけの問題ではなく、保育の全体的あり方と関連させて考える視点を学生たちが自らつかんできたことは、ワークショップの大きな収穫であった。その後の大学の授業で発表者が報告し、他の学生たちにも強い印象を与えた。

パフォーマンス「ジェンダー幼稚園の一日」

日常的な保育場面の中にジェンダー・バイアスがみられることを参加者に視覚的に訴え、意識化を促して何が課題かを共に考えてもらうために、学生と研究会メンバーによるパフォーマンスを行った。前年度「研修会」でのロールプレイを発展させ、保育者・保護者の調査結果や学生が実際に観察したエピソードを材料に、登園時の子どもと保育者のやりとりから降園時まで「幼稚園の一日」の流れの中でごく普通に組み込まれている場面をつないで、より具体的にジェンダー・バイアスを呈示しようと試みた。保育者の対応だけでなく、子どもどうしのやりとりにみられるジェンダー・バイアスもとりあげた。子ども自身のジェンダー・バイアスのある言葉や行動に、保育者がどう対応するか（あるいは対応しないのか）は、ジェンダー・フリー教育・保育にとって大きな要素だからである。シナリオにとりあげたのは、性別で異なるほめ言葉、衣服についての思い込み、ロッカーの性別による区画、「男の子は強くて泣かない、女の子はやさしく」という特性についてのジェンダー、性別カテゴリーを使用しての片付け

や整列の指導、教材の色の性別割り当てなどである（付録参照）。パフォーマンス終了後、いくつかの場面を再現し、参加者に保育者役をしてもらってロールプレイとして展開していき、笑いのある楽しい雰囲気の中で会場と一体となってパフォーマンスをつくりあげた。

参加者の意見・感想

パフォーマンスの後、参加者からは、「今まで自分が保育者としてやってきたことそのままで、恥ずかしく思った」「生まれたときからこんなふうにして（性別役割が）受け継がれて来たんだと感じた。あらゆる場で男女が混ざり合うことが必要だと思った」「今まで、自分がこんな風に教育を受けてきて、それが当たり前だと思っていたんだと感じた。」などの感想が出された。また、ある参加者は現在高校生である自分の息子が、パフォーマンスそのままの教育を受けてきたと思ったこと、自分は玩具などを男女で区別しないようにと心がけ、ままごとを大好きになったのに、幼稚園で年長クラスのとき、友だちに男の子がままごとをしてはおかしいと言われ、「ぼくはもうままごとができない」と泣いて帰って来て、それ以来家庭でもままごとをしなくなったというエピソードを語った。今回のパフォーマンスは、参加者それぞれの経験の中に埋もれていたジェンダーにかかわることがらを引き出し、課題として意識化することに有効であったと言えよう。

その他に、主催者である私たちの大学には保育者になろうとする男子学生がいるのかという質問があり、前年度の研修会と同様、女子短期大学での保育者養成とジェンダー・フリー教育の関係性について問われた。これに対しては四年制共学化を望んでいることを伝えた。また学生発表者の結婚観についても質問があった。これも、保育者を志望する学生たちが固定的な性別役割意識からどの程度自由であるかという、養成上の課題にもつながる質問であり、学生たちとのやりとりが行われた。

ま と め

以上、「男女共同参画社会をひらくジェンダー・フリー教育と啓発」研究のうち、主として研修プログラムの開発と実施した研修会に関する分析・評価、およびNWECでのワークショップについて、その成果を総括した。研修会は大学の研究成果の地域への発信、ワークショップは全国への発信と位置づけたが、この問題に関心を持ち、それぞれの実践を行っている多様な立場の人々が集まり熱心に参加した。少なくとも、子育てや保育・教育、教員・保育者の養成、男女参画社会づくりのための行政や学習などの分野で、乳幼児期のジェンダー・フリーについて考える機運が出てきていることが実感された。しかし一方では、研究においても実践においても、現在はまだ「問題提起の段階」であることもあらためて認識できた。であればこそ、どのような場で、誰にどう課題として呈示するかということが重要であり、そのためのプログラム開発の役割は大きい。今回は、保育関係者以外にも一般の人々を含む広範な対象に向けての単発型・入門的プログラムだったが、今後は対象者を絞り、特化したプログラムを開発し、評価・検討して行くことが必要である。

「慣習化」「保育文化」「幼稚園文化」という概念の提出や、保育全体のあり方との不可分さの指摘など、この二つの発信の場で得られた示唆は今後の研究・実践に有効であろう。また、現在は点在している上記のような人々をつないでゆく作業とネットワークづくりが必要である。その観点からは、本研究がどのように位置づくのか、さらに保育者養成をしている公立短期大学として、本学が今後どのような役割を担うべきか、第二報で考察したい。

引 用 文 献

1）経済企画庁（1997）国民生活白書（平成9年版）　大蔵省印刷局
2）厚生省（1998）厚生白書（平成10年版）――少子社会を考える　ぎょうせい
3）安家周子（1999）　論壇　男女共同参画社会基本法施行と今後の教育：ジェンダー・フリー教育の推進を　全私学新聞、平成11年11月13日
4）松戸市役所保育課（2000）　ワークショップ：ジェンダー・フリーの視点を取り入れた保育とは

── 保育所での試み　国立婦人教育会館（編集・発行）　平成11年度　女性学ジェンダー研究フォーラム報告書、72－73
5）米田佐代子・池田政子・藤谷秀・伊藤ゆかり（2000）　地域から発信する『男女共同参画社会』づくり：市町村の女性行動計画をどうすすめるか　山梨県立女子短期大学紀要、第33号、195－204
6）山梨県立女子短期大学ジェンダー・フリー教育プログラム研究会（2000）平成11年度少子化対策臨時特例交付金関係事業　研究報告書
7）K. Wellhousen（1996）Do's and Don'ts for Eliminating Hidden Bias. Childhood Education, Vol.73, No.1, 36－39.
8）舘かおる（1998）ジェンダー概念の検討　ジェンダー研究（お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報）第1号（通巻18号），81－95.
9）S. L. ベム　福富護（訳）（1999）　ジェンダーのレンズ　川島書店　[Bem,S.L.（1993）The Lenses of gender : transforming the debate on sexual inequality. Yale University Press.]
10）朝日新聞（2000年月28日付）「男女平等」楽しく学んで：自治体「ジェンダー・フリー絵本」作製
11）はちのへウィメンズアクション、サークル・トライアングル、Papas（文）、沢田真理（絵）（2000）　たのしいな：わたしたちの愛する子どもたちへ　はちのへウィメンズアクション（編集・発行）
12）はちのへウィメンズアクション、サークル・トライアングル、Papas（文）、おの　さとし（絵）（2000）　ラバンがきた日　はちのへウィメンズアクション（編集・発行）
13）山梨県立女子短期大学ジェンダー・フリー教育プログラム研究会（2000）　ジェンダー・フリー絵本『これ、なぁんだ』
14）山梨県立女子短期大学ジェンダー・フリー教育プログラム研究会（2000）　遊べるポスター『ジェンダー・フリー国』
15）阿部真美子・川上哲夫・沢登芙美子・高野牧子・坂本玲子・出口泰靖・佐野ゆかり・川池智子・池田政子（2000）　ジェンダー・フリー教育研修プログラムの実践的研究：保育者・保護者を対象として　日本保育学会第53回大会研究論文集, 704－705
16）池田政子・阿部真美子・佐野ゆかり・高野牧子・坂本玲子・沢登芙美子・川池智子・川上哲夫・出口泰靖（2000）　保育・子育てに関わるジェンダー：保育者および親の意識　日本保育学会第53回大会研究論文集, 706－707
17）Reiko Sakamoto, Yukari Ito, Masako Ikeda, Tetsuo Kawakami, Fumiko Sawanobori, Makiko Takano, Yasunobu Deguchi, Yukari Sano, Shu Fujitani, Tomoko Kawaike, Mamiko Abe（2000）A training program of gender-free education for professionals and parents. International Forum and PECERA Inaugural Conference and Meeting.

付　録

パフォーマンス　「ジェンダー幼稚園の一日」（シナリオ）

登場人物
　かなえちゃん（女の子）　さちくん（男の子）　しょうくん（男の子）
　めぐみ先生　　その他　男の子たち：しゅうくん、やっくん
　　女の子たち：まみちゃん、とよこちゃん、ゆかりちゃん

進行役：さて、学生たちが実習にいったとき経験したことを中心に、アンケート調査で幼稚園の先生方が回答してくださったことも含めて、「ジェンダー幼稚園」という、架空の幼稚園の一日を構成

してみました。どこにジェンダー・バイアスがあるか、考えながらごらんください。男の子が足りません。どなたか、エキストラとして参加してくださいませんか？

では、ジェンダー幼稚園の一日、はじまり、はじまり…

♬♬♬♬（場面転換を示す合図の音）

場面1　登園時、保育室にて

進行役：朝です。ジェンダー幼稚園のめぐみ先生のクラスの子どもたちも、次々と登園してきます。

めぐみ先生：（男の子に）「さちくん、おはよう。あら、新しいお靴ね。かっこいいねえ」
さちくん：「うん。ゴーレッドがついてるんだもん。」
かなえちゃん：せんせい、おはようございます。
めぐみ先生：おはようございます、かなえちゃん。あら、かわいいスカートねぇ。
かなえちゃん：（ちょっと立ち止まって困った顔をする。本当はスカートをはくのが嫌い）
めぐみ先生：（その様子に気付かずに）ふたりとも、カバンをしまってね。かなえちゃん、女の子のロッカーはこっちでしょ。ちゃんとピンクでお名前が書いてあるよね。
かなえちゃん：（さち君から離れて、自分のロッカーのところにカバンをしまう。）

♬♬♬♬（場面転換の音）

場面2　保育室で、自由遊びの時間

進行役：クラスの子どもたちがそろうまでの時間、みんな好きなことをして遊んでいます。保育室で、おままごとが始まりました。

やっくん：ぼく、お母さんになりたい！　お料理できるし…。
とよこちゃん：エー、男の子はお母さんやっちゃいけないんだよ。
やっくん：（うなだれて、しょんぼりしている）
まみちゃん：まったく男って、役に立たないんだから。
めぐみ先生：なんで？
まみちゃん：だって、おままごとできないしー、やっくんは虫もこわがってるんだよ。
やっくん：うわーんーーーー！！！！…（突然大きな声で泣きはじめ、泣きやまない）
めぐみ先生：やっくん、男の子でしょ！　そんなことで泣かないの。まみちゃんもね、女の子なんだから、もっとやさしくしなきゃぁ。
やっくん：（一生懸命、泣きやもうとして、しゃくりあげている）
⇒　あとで、「ジェンダー・フリー幼稚園」の場として再現

♬♬♬♬（場面転換の音）

場面3　園庭で、自由遊びの時間
（保育室はそのままの配置で、隅の方にジャングルジム）

進行役：さてお庭でもみんな元気に遊んでいます。あ、3歳のしゅう君がジャングルジムに一生懸命登っています。初めて一番てっぺんに登れたようですね。

しゅうくん：（女の子を見下ろして）みろみろー、おんなと先生はのぼれないんだぞー。
ゆかりちゃん：（登ろうとしていた手をとめて、めぐみ先生に訴えるように）せんせい…

進行役：これも実際に学生が観察したエピソードです。皆さんが保育者ならどうしますか？
　⇒　参加者に
♬♬♬♬（場面転換の音）
場面４　保育室の続き
進行役：さて、保育室では、おままごととブロックでの遊びが続いています。そろそろ朝の会が始まる時間でしょうか。

めぐみ先生：さあ、お片づけの時間ですよ。いつもみたいに、男の子はブロック、女の子はおままごとの道具を片付けてね。さあ、男の子と女の子と、どっちが早いかな？
（女の子はさっさとおままごとを片付け終わるが、男の子を手伝おうとはしないで見ている）
かなえちゃん：おわったー！　先生、男の子は遅いよ。
めぐみ先生：やっぱり女の子は、お片づけが上手ね。男の子もがんばってね。
（片づけが終わる）
めぐみ先生：じゃあ、朝の会をしましょう。元気にお返事してください。小松しょうくん。出口泰靖君。
やっくん：はーーーい！！（大きな声で返事）
めぐみ先生：やっくん、元気なおへんじねぇ。藤谷秀君。白川さち君。
さちくん：（小さい声で）はい。
めぐみ先生：あらら、お返事聞こえないなぁ。
さちくん：（無理して大きな声で）はーい。
めぐみ先生：はい、さち君も元気ですね。あべまみこちゃん。いとうゆかりちゃん。よしかわとよこちゃん。長田かなえちゃん。
かなえちゃん：はーーーい！！（やっくんの真似をして、大きな声で返事）
めぐみ先生：かなえちゃん、もっとやさしい声でお返事してね。(かなえちゃん、不満そう)
めぐみ先生：はーい、お休みのお友達はいませんね。さあ今日はカタツムリの絵を書きましょうね。カタツムリさんが大好きなアジサイの花を色紙で作りましょう。男の子は青の色紙。女の子はピンクの色紙で作ってね（ことばで言わずに、実際に渡すのでも可)。クレヨンを持ってきましょう。女の子たちお先にどうぞ。じゃあ、次は男の子ね。

進行役：どの子も楽しそうに活動しています。もうできあがった子がいるようですね。

しょうくん：せんせい、できたあ。
めぐみ先生：かっこいい！　強そうなカタツムリだね。
さちくん：ぼくもできたあ。
めぐみ先生：さち君のもかっこいいカタツムリ！
かなえちゃん：せんせい、みてみてー。
めぐみ先生：あーら、かわいいカタツムリさんねえ。アジサイの花もとってもきれいにできたわね。

♬♬♬♬（場面転換の音）

場面５　降園時、保育室で
進行役：一日の活動が終わりました。お帰りの時間です。

めぐみ先生：さあ、お帰りのしたくができましたか。並んでバスのところまで行きましょう。
（子どもたち、ごちゃごちゃとしてなかなか並べない）
めぐみ先生：はい、じゃあ、男の子はトーマス電車、女の子はキティちゃん電車になってね。
（男の子と女の子、別の列になって、電車ごっこのようにして、保育室を出てゆく）

♬♬♬♬（場面転換の音）
進行役：ジェンダー幼稚園の一日、これでおしまいです。
さて、どんなジェンダー・バイアスがみつかりましたか？（会場へ）
進行役：印象深かった場面を再現して、ジェンダー・フリー幼稚園にしてみましょう。
⇒　ロールプレイ

初版　2000年7月20日
初演　2000年女性学・ジェンダー研究国際フォーラム　ワークショップ　No.92
2000年8月5日（国立婦人教育会館　208研修室）

山梨県立女子短期大学ジェンダー・フリー教育プログラム研究会

連絡先：〒400-0035　甲府市飯田5－11－1
山梨県立女子短期大学幼児教育科　阿部真美子・池田政子
TEL (055) 224－5261　FAX (055) 228－6819
E-mail　psyche@yamanashi-ken.ac.jp（池田政子）

＊ご活用の際はご連絡ください。

（2001年1月10日受理）